米国の学部学生の負担が増大

US students pay for downturn

EMMA MARRIS 2010年6月10日号 Vol. 465 (678-679)

www.nature.com/news/2010/100609/full/465678a.html

世界の大学は経済不況によって試練に直面している。米国の公立大学の資金難は、授業料値上げによっても解消されず、学生は、苦境を実感している。

米国公立大学協会（APLU；ワシントン D.C.）によれば、米国の学部学生 1700 万人の約 4 分の 3 が州立大学に通っている。その州立大学が今、世界不況によって痛手をこうむっている。経済危機が襲った 2008 年秋、多くの州政府は、直ちに予算カットに踏み切った。そして 2009 年の予算では、さらに痛みが増した。2009 年晩夏に APLU の会員大学のうちの 87 大学を対象に実施されたアンケート調査では、州からの補助金が削減されたと回答した大学が 85 パーセントを占め、授業料値上げと入学者定員増にもかかわらず財源が減少したと回答した大学が 50 パーセントに上った。

また、予算カットの結果、学部学生の教育に影響が出ていることを半数以上の大学が認めている。1 クラス当たりの学生数は数百人規模に膨れ上がり、教育助手の人数が減り、体感型学習のできる実験室や一部の講座が丸ごと消滅し、数々の課程や学部学科が廃止された。これからも事態は悪化を続けると予想されている。景気回復の足取りは鈍く、州政府の税収回復は、景気回復の後になるのが必然だからだ。一方、2009 年に議会で承認された連邦政府の景気刺激策は、この秋には底をつくことになっている。

「ほとんどの学部学生にとっては、これまでより大きな教室での講義となり、実験時間が減り、図書館の利用可能時間も減ることになるでしょう。希望する講座に入れない学生すら出てきます」。こう話すのは、APLU 副会長（学務担当）

の David Shulenburg だ。

特に、講座の人気の高まっているにもかかわらず、学部の予算が減少している大学では、多くの理学系学部学生が、苦境を体感している。

理学系学部学生の予算は近年になく^{ひっぽく}逼迫した状況にあるが、その一方で、生命科学系の講義を受ける学生が急増している、とカリフォルニア大学バークレー校の Cathy Koshland 副学長（受講計画・施設担当）はいう。こうした学生は、米国での高齢化による医療関連の雇用の増加予測とバイオテクノロジー、バイオエネルギー、バイオ医薬品の台頭に引き寄せられている。「今ホットな研究分野には、生物学的要素が色濃くみられます」と Koshland は話す。

影響を受けるのは、生物学系の学科にとどまらない、と Koshland は続ける。「学生は、生物学の講義を受ける前に、ある程度の数学と化学の知識を身に付けていることが求められます」。そのため、こうした科目の教室でも過密状態が深刻化している。これがドミノ効果を生み出し、何年にもわたって大学の教育プログラムに影響を与えることがある。こうした過密化に対処するため、カリフォルニア大学バークレー校の各学部では、討論型講義の頻度を減らすか、クラスの大きさを 2 倍にした。また、場合によっては、講義と実験を切り離し、同じ学期中にその両方を取らなくてもよくなった。

これと似た財源の縮小とクラスの過密化は、全国的にみられる。ワシントン大

学（シアトル）では、生物学の初級課程の学生数が 700 人に増えたため、化学の初級課程で、実験の半分を中止せざるを得なくなった。カレッジ・オブ・サザンネバダ（ネバダ州ラスベガス）では、24 時間体制で講座を増設し、深夜の講座も開設した。

教育内容が低下する一方で、大学の授業料は値上がりしている。ミズーリ科学技術大学（ローラ）では、1 クラスの人数が増える一方で、授業料の値上げが行われ、多くの公立大学が不況以前から行っていたように、民間からの寄付金で州からの補助金の目減り分を補おうとしている。同大学の学長 John Carney は、こう話す。「時代がよかったころは、運営予算の約 60 パーセントを州からの補助金で賄っていましたが、それが今では約 27 パーセントに落ち込んでいます。質の高い大学教育プログラムを組むには、手品のトリックではなく、収入が必要なのです」。

米国の公立大学の授業料は、1999 年以降、毎年、インフレ率プラス約 5 パーセントの値上げが行われてきている（米国カレッジ・ボードによる）。米国の 4 年制公立大学に通う同一州内に居住する学生の年間授業料の平均額は 2009 年度には 7020 ドル（約 60 万円）に達し、学生とその親や大学助成プログラムを圧迫している。学生金融支援担当者全国協会の広報担当 Haley Chitty は、こう話す。「財政的援助の需要は大幅に増え、

予算削減の厳しい影響

米国の公立大学は、2009 年度の予算不足を解消するために以下の緊縮政策を実施した。

学費援助の資格を有する学生の数も急増しました」。

連邦ペル給付奨学金は、有資格者全員に対する助成をうたっているため、この助成金に対する連邦政府の支出が「爆発的に増加した」と Chitty は話す。しかし大学側としては、授業料値上げと学生を通じてペル給付奨学金を奪い取ること

だけでは、予算にあいた穴をふさぎきれない。2010 年度のペル給付奨学金の最高額は 5550 ドル（約 47 万円）だ。

不況によって学部学生の教育にはストレスと費用が多くかかるようになったが、ほとんどの大学管理者は、学士号は今でも「お値打ち品」だと主張している。「我が校の卒業生は年収 5 万～7 万

ドル（約 430～600 万円）を得ていますから、現在の授業料について弁解するつもりはありません」と Carney は語る。Shulenburger も同じ意見で、「これはたいへんなお買い得品です。長期的にみれば、学士号の取得より優れた投資はありません」と話している。■

（翻訳：菊川要、要約：編集部）